

CONTENTS

文化庁月報

1994 **9** No.312

特集●文化政策推進会議報告

- 巻頭言 21世紀の文化政策 坂本朝一 4
- 芸術創造支援・地域文化振興・文化財修復協力の取組み
- 事例① 企業メセナ協議会の取組み 岩瀬慶孝 14
- 事例② 文化による地域づくり・人づくり 長野孝治 16
- 事例③ シリア、アイン・ダーラ神殿遺跡
石彫レリーフの保存修復協力事業 西浦忠輝 18
- 資料 文化政策推進会議報告の概要 20

■てい談

今後の文化政策のブレークスルー

〔芦原義信／倉橋 健／高階秀爾〕 6

都道府県のページ

ご存じですか? こんな文化財⑯

栗林公園、金銅錫杖頭 24

一度は行きたい博物館・美術館⑰

國學院大學考古学資料館 27

法人紹介～文化に息吹を～

アマチュア音楽の振興と普及を図る

(財)日本音楽財団 30

人間国宝を訪ねて③

齋藤 明(鍔金)

聞き手・高田都耶子 32

ACA(Agency for Cultural Affairs)NEWS

- ・平成6年度(第49回)文化庁芸術祭参加公演決定 …35
- ・第18回全国高等学校総合文化祭開催 …38
- ・重要文化財の新指定・選定(建造物) …39

イベント案内

- 第41回日本伝統工芸展／東京・三越本店 ……42
- (第1回印象派展)とその時代／国立西洋美術館 ……44
- 日本の美／京都国立近代美術館 ……45
- 工藤哲巳回顧展／国立国際美術館 ……46

- 著作権法利用講座⑱ ……34
- 今月の国立劇場 ……47
- 編集後記 ……48



「落日」(平成5年度文化庁買上作品)

手塚雄二／作

てづか・ゆうじ／昭和28年神奈川県生まれ。
54年、東京芸術大学美術学部在学中に日本美術院展及び春の院展初入選。同大学院修了後、同大非常助助手に。以後、院展奨励賞、院展日本美術院賞・大観賞など受賞多数。現在は日本美術院同人、東京芸術大学講師。

芸術支援の充実

倉橋 今回、文化政策推進会議の報告「二十世紀に向けた文化政策の推進について」が文化庁長官に提出されましたが、実質的に突っ込んだ議論は小委員会で行われていたわけ

今後の文化政策のブレークスルー



出席者

- 建築家 芦原 義信
- 演劇評論家 倉橋 健
- 国立西洋美術館長 高階 秀爾

最初に、芸術文化支援の観点から報告について申しますと今回は芸術支援の充実がテーマですが、その前に、芸術家の人材養成、芸術創造活動の場の整備と確保というテーマについての議論があつて、そういうものを円滑に機能させるために芸術支援の方策について検討されてきたわけです。ただ、こういうふうな文章にまとめますと、大要抽象的な形で整理をされてしまう。つまり、議論の中で出てきたものは、全部文章の陰に隠れているわけですからそれをくみ取って、まずできることからとにかく始めるということが一番必要なのではないかと思ひます。

フェローシップ制の充実というようなことは既に文化庁のほうでやっているわけですが、それをさらに広げていくこと、また、芸術鑑賞機会の充実とか、地方における芸術を振興するために、今ある文化会館、その他の公共施設をどのように使っていくかというようなことを考えながら、できるところから具体化していくことが必要なのではないかと思ひます。

例えば、発表の場として地方のホールなどが考えられがちですが、大体ホールには小さな部屋や、最近できたものには特に稽古場、

リハールームというようなものも付随していますから、そういうところで研究なり創造活動をし、出来上がったものを地域の人たちに見てもらおうということが望ましいし、そのためにはどういうことができるか等、具体策でできることをまず考える必要があるのではないかと私は思っています。

高階 どの場面でも話が出てきたのは、一つは、もちろん今までもいろいろやっていただいているんですが、従来やっていた予算の充実、それからいま一つはスタッフの養成といったようなことです。

特に芸術創造活動については、倉橋先生からもお話がございましたが、実際に演劇でも美術でも、音楽でも、その活動をしていくときに、どういう点で不備なことがあるかというところを考えると、劇団の稽古場が十分でないとか、美術館ですと展示場だけじゃなくて、調査とか、保存・修理とか、つまり裏方の部分ですね。芸術をつくり上げていくときに支えとなる部分について、ハードの面でも足りない。それから、ソフトの面に関していえば、特に地方でもそういうことがあるようですが、さまざまな催しをするとき、あるいは実際の計画を推進していくときに、その

そうすると、行政のほうでも助成の支援を今までにもやっていただいています。それを充実させると同時に、例えば国際的なあるいは大がかりなプロジェクトについては、複数年度にわたるような活動を予算措置で十分に考えていただいたり、稽古場など裏方の部分を十分に配慮していただく、あるいはまた、研修制度、あるいはフェローシップというところがありましたが、これは芸術家はもちろん重要ですが、同時にアートマネジメントに携わる人々も養成していくことが必要です。

これは地域の問題、国際的な問題とも絡まるわけですが、地方と東京とか、あるいは日本と外国との芸術上の交流、人的な交流も図っていききたい。

倉橋 地方の文化施設、公共施設では、芸術に対して非常に関心を持つ人と、アートマネジメントに詳しい人が二人三脚の形で運営していくことが望ましいのではないかと思います。ただ、役所の人事のように、二年、三年でかわるのではなくて、一生そこにいるものをつくるというような形で、行政も配慮する必要があるのではないかと思います。

高階 ある程度恒久的に行政の人が携わっていたら、それから、分野によっては、美術

館は一応学芸員がいるけれども、私はそれ不足だと思っているんですが、特に音楽の場合にはその学芸員に当たる者すらコンサートホールにはいない。したがって、今はやりくりでやっているようなところがあるけれども、専門と行政の両方がわかる形、ないしは両方の二人三脚の形を制度的に考えていく必要があると思ひます。

地方の場合には、文化庁がどういう形で支援できるかということについて知恵を絞っていただく必要があるわけです。研修制度を充実していくとか、あるいはどこか実際の拠点にパイロットプランみたいなものをつくって、そこを支援していくという形で、地方の行政にもそれを考えていただくことが、これからどうしても大事になってきますね。

倉橋 これは全部がいろんな形でかわってくるので、芸術を振興するためにはどういう方策があるかということを考えなくてはならない。文化庁が音頭取りになっても、地方がついてこなければしょうがないですからね。そういうようなことで、まず具体的に一つでも進めていくことが必要だと思います。アートマネジメントの講習会も、文化庁がなさっているんですが、現在は二、三日の日程です。



くらはし・たけし (1919~)
演劇評論家、早稲田大学名誉教授。1949年に米国・ワシントン州立大学に留学後、講師・助教授を経て、58年に早大教授に。70年~88年演劇博物館長。83年紫綬褒章。文化政策推進会議委員（演劇、舞台芸術）。

倉橋 今回の報告の中では、地域文化の振興に関して、先ほどの芸術文化そのものの振興とも関連して、新たな団体を設立するというようなことが入っているのですが、これについては、団体をつくって、「さあ、やりましょう」という問題ではなくて、どこから手を

地域文化の振興

望ましい。そのために情報の収集と、少し先まで見通した調整が必要になってくるということですね。

つねながら、それが団体になっていかないうち、生き生きとした運動、活動にはならないような気がするんです。

例えば、若い芸術家の発表の場がないということがしきりに言われていますね。文化庁から在外派遣で行って帰ってきた人たちが、どこで成果を発表できるかという、まずないわけです。例えば、ある県出身の人だったら、その出身地に行つて、なるべく一般の人にも音楽のおもしろさがわかるような形の演奏にして、ただ弾きますということではなく、演奏者が話しながら曲の解説をしたり、これはこういうところに特徴があるんですよというところでやれば、自分の発表もできるし、地方の人も自分たちの土地の出身の音楽家だということもあって、また解説がつくことによつて音楽のおもしろさがよくわかると思います。

それから、これは何も演奏家だけが在外派遣で行っているわけではなく、作曲家や音楽

学を勉強しようとする人も行っているはずですから、そういう人とペアで出ていって、そういう形で演奏会を持つこともできると思います。同じことはなにも音楽だけではなく、美術についても言えるのではないかと思います。

高階 そうですね。ジャンルを超えた情報の交流と組織化をしていく。団体設立というのは、実際の活動から生まれてくるのが望ましいんですが、例えば地方のそれぞれの美術館なりホールなり文化会館なりの、実際には今いないのかもしれないが、アートディレクターなりアートマネジャーの人たちとうまく定期的に連絡を取るとか、仮に団体ができたなら、その人は地方をグルグル回って情報を集める。地域の間の情報交流、それから今お話が出たように、ジャンルの違う者同志の間に

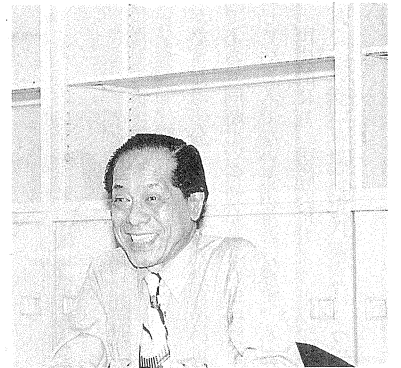
あしはら・よしのぶ (1918~)
建築家、東京大学名誉教授。戦後初の建築留学生としてハーバード大学で学ぶ。帰国後、建築設計研究所を創設する。その間、法大、武蔵美大、東大の教授を歴任。83年「国立歴史民俗博物館」で芸術院賞。文化政策推進会議委員（建築・デザイン）。



これなんか一週間とか、十日間ぐらいいみっちりやるほうがいいのではないかと思いますね。音楽学校の学生でもオーケストラをやる機会が少ないし、一つの学校でやるとレベルが違ふために、いい成果が上がらない場合があるので、ある程度以上の学生を一つの場所に集めて、二週間なり三週間なり勉強することによつて、オーケストラはどういうふうにするか、いい音が出るようになるかというのを、セミナーのような形でやるというような話も出ていました。

また、演劇のほうでも、それぞれ違った方

法論を持つている演出家がいるわけですから、高階 報告の中にも出てきておりますが、創作性の高い公演は現在、東京圏中心で行われている、地方にはいらない。それに関しては、情報収集・蓄積、利用という問題が出て、東京で行ったものを地方に持っていきたいという劇団もあるし、地方もホールとか劇場があれはいるときがあつて、それをうまく調整すればできるわけですが、「二三年後の計画はよくわからない」ということがある。情報を何かの形で少し先まで含めて収集して、いろ



たかしな・しゅうじ (1932~)
美術評論家、国立西洋美術館長。1954年からフランス政府給費留学生としてパリ大学附属美術研究所で近代美術史を専攻。帰国後西洋美術館勤務を経て、71年東大助教授、79年教授。91年から現職。71年芸術選奨文部大臣賞。文化政策推進会議委員（美術）。

私はこの人につきたいという場合は、その演出家の人に、音楽のオーケストラと同じように、二週間なり三週間講習を受けて、そこで受けた成果を自分自身の中で消化するともに、それぞれの地域の活動の場で具体化する

ことも考えられるのではないかと、これが、繰り返し議論されてきました。だから、この報告書はこれで終わるのではなくて、これが始まりなんだということを考えていただきたいと思います。

同じような話は、演劇のほうの方からもいろいろ出ました。その場合に、地方がある程度予算も持つということになれば、もちろんそれができるわけでしょうから。

美術館の場合でも展覧会を回すときに、地方の美術館もある程度予算はあるが、それだけの美術館が全部自分で展覧会をつくるのではなくて、どこかで企画されたものが回つて、地方にも芸術鑑賞の機会を与えるという形が

情報ができるだけ流れるようにして、いろんな催し物を組織していく。これがやっぱり今欠けているところだと思っています。

そういう方面でどういうことをやればいいか。連絡会議みたいなものをするのか、あるいは情報センターみたいなものをつくって、地方からもアクセスできるようにするとか、いろんな形が考えられると思いますが、それは少し長いスパンでこれから考えていくことが必要だと思っています。

芦原 地域文化振興については、報告の中で初めて、一つは「地域の個性豊かな文化を創造・蓄積する」、もう一つは「優れた文化に触れる機会を充実する」、もう一つ「暮らしの中の文化を育てる」ということで、理念として三つの大きな柱が示されています。二十一世紀に向かって今の時代、我々が最も望んでいるものは、心の豊かさだと思っているわけがあります。そんなことから考えて、地域文化の一層の振興を図ることは、非常に大切なことだと思っています。そのために、国と地方自治体が適切に役割を分担して進めていくことはもちろん大切ですが、何よりも大事なことは一人一人の個人の問題であらうかと思っています。そんなことで、この報告書の中では、地域

文化振興の現状と課題が述べられておりまして、次いで地域文化振興の今後のあり方が述べられているわけです。

まず、一番目には「地域の個性豊かな文化を創造・蓄積する」ということですが、私も何となく地方の豊かな個性が失われつつあるというのも事実だと思っているわけです。

二番目には「優れた文化に触れる機会を充実する」ということですが、これは先ほどから先生方がおっしゃっていましたように、本物に触れるというか、警政に接するということは、地域の文化振興に役立つと思います。それから、「暮らしの中の文化を育てる」ということで、遠くのほうにあるのではなくて、本当に自分の暮らしの中に文化を育てることが大事だということ述べたわけです。以上三点を地域文化振興の基本的な方向としてお示し、さらに具体的な施策について述べてあるわけですが、基本的には地域文化振興は我々個人の決意というか、覚悟というか、受け入れ態勢が非常に大切だろうと思うわけです。

特に最近、地方へ行ってみますと、非常に立派な施設ができております。それがなかなか毎日使われるというふうになっていないと

いう点が先ほどから問題になっている点の一つかと思えますので、その辺等について、うまく施策をぜひお願いしたいということが書いてあるわけです。

倉橋 文化庁のほうでいろいろな情報を集める場合も、ただどこにこういうホールがあるとか、文化会館がある、あるいは美術館があるということではなくて、極端に言えばその設計図まで取り寄せて、これはこういう規模だから、これができるだろうということを示して、それを県なり市なりの自治体に、今度こういうものを持って回りたいんだけれども、おたくの施設のことでやれないだろうかというようなアドバイスをして、決して地方自治に対する口出しにはならないと思います。

芦原 それと最近では地域格差が減りまして、地方都市へ行ってみますと、いろんな文化を十分に吸収されている。ただ、本当にいい絵とか、いい演奏とか、そういうものに身をもって触れる機会はどつちかというところ少ないかもしれません。

高階 地方ではいいものをやれば割に皆さんが来るということはあると思います。ただ、機会が少なく、あいている部分が少ないぶんあるということはもちろんあるわけでしょう

から、それをどうやって埋めていくか。

芦原先生が主査をなさった地域文化については、芸術創造活動の発表の場とか、あるいは鑑賞機会を充実させるということが一つ。

これは地方のほうから言うと、いわば受信型の活動なんです。もう一つ、今失われつつあると言われている地域文化を、逆に発信していくことも大事な役割で、町づくり、町並みの問題もそうだと思います。先ほどお話が出た、地方出身で活躍している芸術家をそこで顕彰するとか、あるいは美術館なら地方出身の美術家の活動を知らせる。地方から発信することをこれからやっていく必要があると思います。

それにはもちろん連絡調整も必要ですが、例えば地方の発信に関して、これは演劇でも伝統芸能でも、美術でも、何でもいいんですが、地方発信文化を顕彰する制度を何か考える。今年はこの地域のこれがよかったというようなことをすれば、地方も張り切るだろうし、同時にそれが新しい創造活動に結びついていくような方策を考えることも必要だと思っています。

芦原 高階先生の言葉の中に「町並み」という言葉が出ましたが、地方へ参りまして駅へ

降りますと、もうこの駅前も同じで、「これは一体どの町か」などと思うことがしばしばなんですけれども、最近やっとなんかそう

だと思いましたが、非常にアイデンティティのある町をつくるのではないという気運が、市民の間にも行政の間にも出だしてきた。これがうまくいくかどうか、今後の問題だと思いますが、そういう気運もそろそろ出てきている。ほかの町と一味違うものができてきて、今、地域振興の施策が出ていますが、タスキングとしては非常にうまいのではないかと

高階 芸術祭とか、国民文化祭とか、そういう機会に、この町並みがいいとか、あるいはこの美術館の活動がよかったというのを顕彰する機会は考えられないですかね。顕彰すればみんながんばると思います。逆にそれでまた情報が集まってくる。「私どもはこんなことをやっていますよ」ということで、そういうことも一つ考えられると思います。

倉橋 国民文化祭の場合も、今年三重県ですから、三重に全国から集まってくるんですね。ですから、そこでの演奏なり、芝居なりでよかったもの、あるいは美術も入っています

すから、そこで優秀な作品を描いた人たちのものを、全国とまで言わなくても、何か所かにまとめて回るとか、そういう活動に文化庁で助成をする。その場合に必要なのは、情報を持つていて、「ここならやれそうだ」といつて、周辺の県に持ちかけなければいけないと思います。その情報はやはりまとめて文化庁で持つていく必要があるのではないかと気がします。

芦原 札幌芸術の森公演でバーンステインが若い人と一緒に音楽の練習をやって、非常に刺激を与えたと聞いております。

やっぱり本物に触れるのはいいことで、さつき言われたように美術でも写真やなんかでなくて、本物の絵、彫刻を見ると感激するんじゃないですかね。よく見ないとわからなくても、どこか違うんではないかと思えます。

高階 町並みなり伝統文化に関しても、どういう形がいいのか。毎年顕彰するという形を順繰りに行っているのもいいし、あるいは文化庁が音頭を取って、地方の人も集めて、芦原先生を中心にシンポジウムを開いて議論をするとか、いろんな形の仕掛けを考えて、みんなに考えてもらうような方向に持っていかないと、押しつけただけではもちろんダメだ

と思います。

芦原 町並みで非常に印象的な話は、ワルシヤワの中心にある広場です。ワルシヤワの広場に面する建築は、爆撃される前に建築科の学生やなんかでオーナメント(装飾物)を外してしまっておいて、戦争が終わってから、前と全く同じ広場をつくったわけです。建物の中はかなり違っているようですが、外観は同じです。

例えば、銀座を再建するときに、戦前と全く同じように銀座を再建するかと言われると、我々日本人のほうはそんなことは夢にも考えないと思います。建物の装飾物を全部外しておいて、同じものをつくるなんていうアイデアは全然わかなかった。何とかもつと新しいものにしたいという、それしかなかったと思います。火事で焼けて、新しい銀座をつくったときに、うれしくてしょうがなかったという。その辺から文化を考えると、どっちが本当なのか。日本の場合は伊勢神宮ではないけれども、二十年ごとに式年交替するほうがいいのかなという気もしないではないです。それが我々地域の文化と非常に密接な文化論として関係があるでしょうね。

高階 国際交流に関わる話でもあるし、シン

ボジウムは国際的にやってもいいんですね。

古いものを保存するのと新しく開発していくというのは必ず問題が出てくるわけです。従来経済発展の問題としていろいろ議論されていきますけれども、文化の問題としてやっぱり考える必要があって、どういう形が望ましいとか、こういう実例があるとか、答えが一つでなくてもいいから、実際に何かの形で示してみるとおもしろいですね。

倉橋 さっきの芦原先生の話は、ワルシヤワだけではなくて、サンクトペテルブルクもそうです。

芦原 だから、日本に来る方は、十年後に来ると全然違っているんで、びっくりしちゃう。その割にパリへ行っても、ローマに行っても、十年前とちつとも変わっていない。その辺をどういうふうに変えたいのか。

それから、今、保存問題がずいぶん出ているんですけども、有名な明治時代の建物などを保存しようというときに、その一軒だけを保存すると、都市計画的に非常に困る場合が出てくるんです。日本の場合はヨーロッパとはかなり違う、独自の地域文化を振興しなければならぬことはあろうかと思っています。

ツト」をやるとか、猿之助が「リュウオー」という作品を歌舞伎と京劇と一緒にまぜてやるということには既にやっているんで、それをいかに伸ばしていくか。それこそ支援体制がまた必要になってくるのではないかと思います。

芦原 今、シンフォニーは、外国のシンフォニーでも日本の方がほとんど入っているでしょう。

倉橋 入っています。弦楽器が多いです。

芦原 何も不思議な気がしないですね。十年前は何がちよつと不思議な気がしたような印象があるんですが、最近では日本の楽団の中に外国の方が入っても不思議ではない。

今後の文化政策

芦原 最後に一言ずつ申しますと、やっぱり文化がこれから一番大切ですね。ここまで経済大国になったんだから、これから文化大国にぜひなるようにお願いします。

倉橋 直接これと関係あるかわからないんですが、ひとところ国立劇場に行きますと、年輩のご夫婦がかなり多かったです。料金

国際文化交流の推進

高階 外国文化との比較の話も出ましたけれども、今回の報告では特に国際交流では、小委員会の報告の冒頭にございますが、外国の文化を受け入れる受信型、相互に交流する双方向型、さらにその先の段階といえますか、一緒に共同して何かをやりましょうというような、成長過程という考え方があって、今後共同型についても充実すべきではないでしょうかという提言があるわけですが、今回初めてこういうことを公の文書で言ったかと思っています。

我が国の場合、明治以降は一生懸命受け入れていたわけで、そのために、日本の伝統的なものを忘れてしまった部分もあると思います。今後は受信型だけではなくて、日本のものも出していかねばいけないということが一つ。

それから、確かに今後一番大事なものは、一緒にやっていくということです。これは実際問題としては、人的なネットワークの形成とかかわってくると思いますが、実際にやりましようと言っても、全然関係のないと

が歌舞伎座の半額とは言わないまでも、かなり安いわけです。ですから、夫婦で行っても見られたんです。ところが、今、少なくなりました。利子下がったでしょう。行く余裕がなくなってきたんです。

そういうことを考えると、イギリスなんかでは、例えば、水曜日から木曜日のマチネは年金生活者は半額という制度があるんです。こういうように利子が少なくなった場合、国立劇場にさえも行けなくなったお年寄りのために、年金生活者は半額なんというところも考えられるのではないかと思います。

高階 基本的には社会全体で文化を、国民の側からすれば享受し、活動にも参画できるような体制というか、制度というか、そういうものを整えていくべきではないだろうかと思えます。それに一步でも二歩でも近づけるようにするために、今はそれから余りにも離れたところにあるのではないかとということもよく言われるようになっておりますので、文化庁におかれては、今回の提言を参考にしながらがんばっていただきたいと考えております。

編集後記

九月とはいえ、まだまだ残暑が厳しい今日この頃ですが、皆さん元気で頑張っていますか？

平成元年に発足以来鋭意検討を進めてきた文化政策推進会議が、六月に報告を取りまとめたことから、今月号はその特集を組み、三人の各小委員会の主査にいてい談をしていただきました。名簿を見ればわかるとおり、文化政策推進会議は実に多士済々、きら星の如く各界の著名人が集まっております。これらの先生方の叡智を結集した報告書は誠に重要なものと思われてなりません。将来、文化振興法の制定や文化省の設置というような動きになった時、これらの先生方がその実現に向けて大活躍してくれることでしょう。これからは、この報告書を踏まえ、文化庁が新たな文化政策の展開を図っていく番です。委員の先生方の期待を裏切らないよう、頑張らなければいけないと思います。なお、今月号では報告書の全文を掲載することはできませんでしたが、御希望の方は文化庁総務課文化政策室まで御連絡ください。

(栗)

文化庁月報 9月号(通巻312号)

平成6年9月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社ぎょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12

電話03(3571)2126

営業所 〒162 東京都新宿区西五軒町4-2

電話03(3268)2141 (代表)

振替口座 00190-0-161

印刷所—(株)行政学会印刷所

定価530円(本体515円)送料76円

年間購読料6360円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株)ぎょうせい営業第一課宣伝係

電話03(3269)4145 (ダイヤルイン)

©1994 Printed in Japan

ISSN 0916-9849